

大乘寺（だいじょうじ）

平成31年4月第3週放送

北陸金沢の地にある大乗寺は、当初は金沢郊外の野々市に富樫家尚（とがしいえひさ）の支援により真言密僧の澄海（ちょうかい）が十三世紀中頃に開いた寺でした。

曹洞宗大本山永平寺の三世つまり三代目の、徹通義介（てつとうぎかい）禅師に帰依した澄海（ちょうかい）は、大乗寺を曹洞宗に改め義介禅師を開山に招き、その後加賀百万石で知られる前田家の支援もあり、戦乱の中で四度の移転を経て、一六九七年（元禄十年）に現在の地に移りました。

義介禅師は元々達磨宗の懐鑑（えかん）和尚について出家しますが、宋の国、当時の中国から帰国し建仁寺にいた道元禅師に出会い、その教えに触れ弟子となります。

師匠である道元禅師が亡くなられた六年後、道元禅師のあとを嗣がれた懐井（えいじょう）禅師の命により京都や鎌倉の寺院の建物つまり伽藍を調査し、続いて宋の国に渡ります。

道元禅師の修行のあとを歩まれて各寺院の伽藍や規範、佛具に至るまで細かく調べ、帰国して「五山十刹図」二巻を著しました。これを基に大本山永平寺や大乗寺の伽藍や佛具、規範を整えたと言われています。この膨大な作業をした理由とは、京都深草の興聖寺が火災に遭い、道元禅師が宋から伝えられた清規と呼ばれる規範や経巻などの書物が焼失した為、改めて調べ直す必要があったからなのでした。

その後、弟子の大乗寺二世、瑩山禅師は後に能登に永光寺を、続いて大本山となる總持寺を開いて曹洞宗を大きく広められたのです。

そして大乗寺では整った建物、伽藍と共に、修行道場の規範である清規も独自のものが作られました。

時代は下り江戸時代に、二十六世の月舟宗胡（げっしゅうそうこ）と二十七世の卍山道白（まんざんどうはく）により「梶樹林清規」が出来ると、修行の厳しさ

『 禅のこころ -曹洞宗- 』

で広く知られるようになりました。

今も修行僧を擁する修行道場としての日常がありますが、広い境内は開放されていて、一般の方も参加できる坐禅会も毎週日曜日の午後に開かれ、その厳しい修行の一端に触れることが出来ます。

北陸の金沢というと歴史を感じることの出来る観光地として知られていますが、その一角に、山を背にした静けさに包まれた修行の環境が今も残されています。お寺を護り、教えを伝えてくださった、歴代のお祖師様の足跡を辿り、足を延ばして訪れてみてはいかがでしょうか。

— 終 —